

史料紹介 『金毘羅参詣道中日記』

近世の旅に関する記録は膨大な量にのぼろう。その内容も芭蕉の『奥の細道』から、一般庶民が単に金銭の出入を記入したもので多種多様である。なかでも旅における自身の行動や各地の風俗などを記した道中日記は、文学的価値こそないものの、近世史研究者に多くの情報を与えてくれる。こうした道中日記の翻刻は従来各地の研究者や歴史愛好家の手によりなされ、そのほとんどはガリ版あるいはタイプ印刷で出版されてきた。近年こうした記録が見直されたためか、大手出版社の手により刊行されるようになった。もっともこうした道中日記を駆使しての研究はいまだ行われているとは言いがたく、今後の大きな課題であろう。

ここに紹介する『金毘羅参詣道中日記』は、国立歴史民俗博物館に所蔵されており、東海道掛川宿近傍の人々六名により金毘羅へ参詣した時の日記である。その身分は不明であるが、富裕な農民であ

山本 光正

ったと思われる。安政三年二月二〇日に一行は掛川宿に集り、同二日掛川宿を立出している。その主なコースは次の通りである。

二月二〇日掛川泊、二四日名古屋泊、二六日養老滝を見物、柏原泊、二九日より三月二日まで京都見物、三月一〇日金毘羅参詣、一二日丸亀より舟に乗り一六日大坂着、一八日堺見物、二六日伊勢神宮参詣、四月五日帰郷

全行程四四日間の日記で、その特長は支出が克明に記されていること、旅における行為がよく記されていることにある。

支出が克明に記されていることにより、各地の物価は当然のこととして、日常の食物を知ることができる。一行はよく酒を飲んでゐるが、しばしば味醂を飲んでいる。

旅行の総費用は合計金一両一分一朱銀一四匁七分と錢二七貫一三文で、このうち宿泊費（船中泊の場合は船代）は金二朱と錢八貫

四四四文である。

旅中における自分達の行動が記述されているが、このなかから、いくつかの記事を次に紹介してみよう。二月二八日越川宿を出立した一行は各地のことをよく知った人と道連れになるが、どうも烏乱なる人のため、草津辺りで別れている。

三月二五日、一行は伊勢に向かう途中伊賀茶屋辺りの谷川で禪を洗い、さらに峠を越してから襦袢を洗っている。

翌日山田妙見町に宿をとり、髪を結って湯に入り、夕食後古市の備前屋に上っている。遊女が三〇人来るが、各々の好みの遊女と酒肴となり、宿には暁方に帰っている。備前屋での払いは金一分二朱である。

旅から帰っての記述も詳しく、四月五日家に帰ると近隣の人々が集り、翌日も皆で酒を飲み、ぱちぱちの歌が大いに流行したとある。九日に父親の土産を金谷に買いに行き、十日に村中の人に土産を配り、旅はすべて終っている。

この旅日記から見れば、一行はかなり潤沢な費用を持って楽しみつつ旅をしていたことが窺れる。所持金の多寡はともかく、楽しみとしての旅に出た近世の人々は宿々で破目をはずし、又は見物した事物に驚き旅したのであるが、近世の人々にとっての旅は、地域のそして村の規制からの一時的解放であった。村内において個人的

に破目を外せばまたたく間に村内中に知れ渡る。しかし旅はそれが許されたのである。一方、宿場もそれを承知した上で旅人を迎えたわけである。

現代日本人の旅の源流は近世に形成されたと考えるが、近世と現代の旅の本質的な相違は交通手段にあらう。現代は目的地に短時日のうちに達することが出来るが、近世及びそれ以前の人々は自らの足により目的地に向かわなければならなかった。これは単に時間の相違ではなく、旅の本質に拘る問題である。

人間にとって生理的に合う速度は歩く早さではないだろうか。楽しみとしての旅を考えた場合、歩く速度により、各地の人情風俗等を徐々に体験し脳裏に納めることができる。さらに各地を歩く速度で通過していくため、当人が意識するとしなやかに拘らず風物の変化を順を追って体験していくことができたのである。

一方、交通機関の発達は目的地に速に運んでくれるものの、その多くは単に目的地に着いたということだけであり、そこから得るものは近世または近世前の旅から見れば激減しているのである。

金毘羅参詣道中日記

蓮沼 板倉 六平
道 植松 大井久兵衛
安政三年

丙辰仲春日

牛尾 増田才助

行 同 北川次郎平

蓮沼 滋藏

安政丙辰二月廿日朝五ツ時才助・次郎平出立、上之弥助掛川迄供ニ行、先峠新屋ニ而休ミ、次ニ馬喰ニ而休ミ、酒を吞昼食致シ、夫より掛川宿捻金屋ニ到リ、植松久兵衛様と前着致シ、其内蓮沼六平様・滋藏殿来リ、弥助と早々帰り、先仕度致す、久兵衛様五人之笠を買イ、予右之笠ニエの字を印ス、皆夫々ニ仕度、色々求メ一盃飲で夕飯、共々ニ臥す、比日殿様大筒雷の如シ、宿屋茶代式百文置、

一廿四文 峠新屋茶代

一百四拾八文 馬喰 酒昼食

一百文 掛川 帳面

一廿四文 同 ちミがき

一式百四拾八文 同 帯扣

一式百拾六文 同 笠

一式百拾六文 同 旅籠

一三拾八文 同 茶代割合

廿一日晴天宿を立、先原河薬師様へ参詣、爰ニ休ミ袋井ニ而くも助馬を勸メ、無挽六平様見附迄乗り、見附ニ而昼食、鰻のかど焼うまくなし、次ニ近道へ入る、比辺去年大水ニ付百姓多く道畔ニ乞食致シ、

天竜川舟賃終ニ不払、八ツ半時浜松駅帯屋ニ到リ荷物置く、五社様へ参詣帰りて伯る鄰座敷坊主五六人居リ、女を噪ケして寝られもせず、誠ニ困入候、此屋頂寧なり、茶代三百文置、

一拾八文 川原 味淋

一百式拾四文 見附 昼食

一廿四文 浜松 櫛

一式百拾文 同 弁

一式百文 帯屋 旅籠

一五拾八文 同 茶代割合

廿二日天氣好宿を立、舞坂ニ而蛤の吸物をやらかし、舟ニ乗り、早速荒井ニ付、御番所を通リ、白須賀ニ而中食、此辺女之髮誠ニぶきなリ、夫より吉田手前川原村ト云所々豊川近道ニ這入、予少々腰いたミそろそろ歩行、暮川舟渡を越シ七ツ時豊川稻荷様へ参詣、御縁日ニ而賑なり、当所櫛屋ニ伯り、

一六拾四文 舞坂 吸物

一五拾四文 同 舟賃

一五拾文 同 菓子

一廿文 同 舟玉

一八拾文 白須加中食

一拾文 岩谷 甘酒

- 一拾六文 二川 わらじ
- 一廿四文 豊川 御札
- 一貳拾四文 同 あんま
- 一貳百文 同 伯り賃
- 廿三日雨天なり、宿を立、二里斗り行て御油宿ニ出ル、赤坂ニて休ミ、藤川宿辰巳屋ニて昼食、夫より雨歇ム、岡崎之大橋破損ニ而、舟渡あり、橋之下ニ七十余り之老翁所々国々嘶致、橋の口訳致シ、甘酒を売る、少シ行て一八の蕎麦を食イ大ニ安シ、夫より大浜油屋ニ伯り、
- 一三拾貳文 わらじ紐宝蔵寺ニて
- 一五文 同所 もち
- 一四拾八文 赤坂ニ而
- 一四拾八文 辰巳屋中食
- 一十三文 岡崎 舟賃
- 一八文 同 甘酒
- 一三拾貳文 同 そご切
- 一十六文 同 わらじ
- 一貳拾八文 木下茶屋 酒
- 一百八拾四文 油屋 旅籠
- 廿四日天気宜、池鯉鮒大明神様へ参詣、又一里程行て酒を呑ム、次ニ三拾壹文ニてわらじ買、荷物へ付ニ行、桶掬間ニ而粟の菓子うまし、

- 夫が鳴海・桑名屋ニ而中食、烏賊のすあ糸塩梅好シ、彼のわらじ欲履之無、爰ニ而又壱足買イ、次ニ宮ノ笠寺へ参詣、一の宮へ参詣、熱田大明神へ参詣、名古屋御坊へ参詣、大イシテ明なり、夫が本町七丁目近江屋ニ伯り髪を結イ天神様の夜宮ニテ賑也、思々ニ遊ニ出る、
- 一貳拾文 酒 一三拾六文 名古屋色々
 - 一三拾壹文 わらじ 一三拾貳文 同 髪
 - 一拾貳文 粟ノ菓子 一貳百文 同網袋
 - 一八拾四文 中食 一 金壹分貳朱ト 永楽堂
貳百七拾貳文 韻府一隅
 - 一十八文 わらじ 一貳百文 近江屋伯り
 - 廿五日天気好、宿を立、天神様へ参詣、植樹市ニ而賑なり、久兵衛様焼物屋へ尋寄、爰ニ本を川崎迄頼ミ、羊羹を貰イ金城之西ニ大坂分同河内之宿引、是江御尋被下候与委ク頼ミ、次ニ花目寺へ参詣、津島岩田屋ニて中食、牛頭天皇様参詣、夫より半道程行テ早尾ニテ舟を越シ、是より美濃国なり、あきエニテ舟を越シ、木曾川ニシテ登り下りの舟数多有、爰が一里半斗り行テ今尾宿なり、竹之腰様の城下ニシテ、当所尾張屋ニ伯り養老酒を呑ム、
 - 一貳百四拾八文 名古屋弁当袋 一拾五文 同 一〇〇〇〇
 - 一十文 甚目寺串団子 一六拾四文 岩田屋中食
 - 一廿四文 津島 ニ而 一三拾貳文 同 ウむどん
 - 一貳拾文 早尾ニテ 一十文 舟渡二度

一三拾貳文 養老酒 一貳文 宿帳

一貳百文 旅籠 一五拾六文 布切

廿六日天氣好、宿を立、伊尾川舟渡をこし、三里程行テ養老滝の裾ニ到リ、火打石を拾イ不動様明日より開帳ニテ飴あり、參詣致す、石碑ニ歌あり、

孝行の心を天も水にせず、酒と汲する養老の滝

浅草庵市人

夫より八丁登りて滝ニ到、其景殊ニ好シ、予一詩を詠る、

千尺飛降無定形薄烟濕薛地尤冷恐洗口眼吞選擇比水由来云叙靈

右養老瀑布

夫々天神様參詣、菊水を吞ム、千歳楼ニ臻テ休、前庭ニ桜楓其外木

多、眺望之景色日本一ト思所也、石碑ニ歌有、

美濃之國多芸行宮大伴

宿弥東人作歌一首

従古之言来流老人之變云水曾各爾眞滝之瀬

大伴宿弥家持作歌一首

田跡河之滝乎清美香従古宮社兼多芸乃野之上爾

正二位前大納言

藤原永雅書

芭蕉翁石碑有

むすぶより、早齒にひくく、泉かな

予爰ニ而載一詩

前庭三四桜帶蕾又含情不野孤城點遠山白雪冷主人

無常患汲瀆有佳馨偶到終嫌去長遊菊水醴

右遊千歳楼

此家主人四方山の咄致、山々をおしゑ、諸家様御成記録帳ヲ見せ、

共ニ長休ト成り、昼食致、夫より関ヶ原へ趣ク、沢田ニ而壹盃吞ミ、

養老より三里程行テ古戰場を過関ヶ原駅ニ出ル、今須町ニテ休ミ、又

寝物語ニテ休ミ、柏原町角屋久蔵方ニ宿シ、此屋好き家なり、茶代貳

百文置、

一五文 伊尾川舟

一百三拾貳文 千歳楼ニ而

一拾九文 同茶代割合

一拾六文 沢田ニ而酒

一貳拾四文 今須ニ而色々

一十文 寝物語ニ而餅

一拾六文 角屋ニ而達者菓

一貳百文 角屋旅籠

一四拾八文 同茶代割合

廿七日天氣好、同所亀屋の築山を見物致し、夫よりすりそり峠望湖

堂ニ休ミ、爰ニ美人二人、是も休ミ居リ、其側ニ坐ス、眺望風景奇妙也、

予一詩を僛べる、

垂楊輕薄大湖塘三四漁舟點綠浪間坐湖堂雖望好可飲小酌美人傍

夫より鳥居本ニ至リ赤玉を買、次ニ彦根城下ニ臻リ、清涼寺へ参詣、

大宝王弁天様へ参詣、景色好所なり、其下ニ而休ミ中食、夫が御城

通りを拝見、見込好事此上なし、町屋賑ニして皆諸国商人なり、夫

より南ニ向て往還通りへ出、直ニ南ニ一里程行て多賀大社様へ参詣、

爰の観音様も明日が開扉なり、随分好町あり、大坂屋ニ休ミ壹里行

て道中高宮ノ駅ニ出、少シ行テ葛籠村ニ而名物之ト細工を買イ、

越川宿竹の子屋重郎兵衛方ニ伯リ、

一四拾八文 望湖堂味淋

一拾六文 同 あんころ

一四拾五文 鳥居本赤玉

一貳拾六文 大ホラ酒肴

一貳拾八文 大ホラ吸物

一十貳文 彦根わらじ

一拾貳文 多が御札

一拾六文 大坂屋もち

一貳百八拾文 葛籠村ニ而色々

一三拾貳文 竹子屋ミりん

一貳百文 同 旅籠

廿八日天气好、宿を立、其内処々委ク知りたる人と道連ニ成、武佐

駅松屋ニ休ミ、上茶斗ニ而シヤレタル家なり、又鏡宿ニ而休ミ、爰ニ而

持参セシ羊羹を開ク、篠原ニ而中食、又中沢ニ而休ミ、夫より草津出

る、東海道ニ而殊ニ賑なり、右道連ニ成シ人何かうろんに見へ候得

共、爰ニ而別レ、拙者共ニ瀬田ニ趣ク、無程唐橋ニ到、百足山を見

る、爰ニ田原藤太之宮有、直ニ舟ニ而石山寺へ行、山色面白事凡日本

一なり、参詣シ、又舟ニ乘りて大津ニ趣ク、早速唐橋を過東ニ百足

山を見る、西ニ膳所の城有のろし式ッ三ッ上リ、舟ニ比叡山ニ向て

行、日落将夜スレハ大津舟場ニ付、宿引一同其家ニ到れば平野屋なり、

鹿末之売女有て共ニひやかし、水風呂浅き事足首なり、

一八文 松屋茶代

一八文 橋代

一四拾四文 処々休所ニ而

一三拾六文 石山ニ而

一五拾八文 湖舟賃

一貳百文 平野屋伯り

廿九日天气好、三井寺へ参詣、行ずり鐘を看ル、予腰ニ矢立無、直ニ

滋々同々ニ而平野屋へ帰り、早速矢卓有、夫より湖辺之道を行唐崎

之松ニ到り、見物茶屋ニ而休ミ居レバ、三人之連達漸来リ先爰ニ而小酌致シ、石碑あり

唐さきの松は花より

をぼろにて

芭蕉

夫より比叡山ニかゝり、古と百万石も有とミテ、石橋杯仰山之者なり、漸高きに上りて中堂薬師様へ参詣、講堂大日如来様へ参詣、戒壇堂へ参詣、大六茶屋ニて休ミ、其外処々へ参詣、惣りん塔を看ル、又大六ニ而弁当致シ、夫よりきらゝ坂下り、京洛中、委ク看ル、此坂五拾丁余リニして下ニ不動様有、爰より一里半程行て京都ニ臻リ一盃ヤラカシ、烏川岸を下り三条通り大橋東結美濃屋徳左衛門方ニ伯り、商人数多来リ、

一拾八文 唐崎酒肴

一拾四文 比永山ニ而わらじ

一四拾七文 同 大六天ニ而其外

一三拾式文 京都酒肴

一百六拾四文 ミの屋ニ而掛幅

夜る酒ニ酔て共寝る、明レハ三月朔日なり、雨天ト成先髪を結、夫より案内を取て御所辺より東山通りを見物致シ、あまり参詣場多故、委ク記さず、真如堂其前ニて中食、ちご院乃鐘大さ壹丈六尺、さしわたし九尺五寸、あつさ九寸ノ余、目方式万貫目有ト云、夫が段々

清水寺へ臻リ、此前通りニ而烏屋へ至リ、女夫亀を見る、清水焼物ヲ買イ、次ニ祇園町ヲ通り、青楼之玉女如花、道行皆々口ヲあいて歩行、夕方美濃屋ニ帰ル、飯後一飲を催す、又雨ヲ聞て眠る、

一三拾式文 髪

一百文 中食

一十九文 案内中食割合

一三百八拾式文 御札・べに・清水焼外色々

一式拾四文 あんま

二日曇リ、案内を取り、先大徳寺今宮ノ社、夫が山道を行て金閣寺拝見料十人迄々式百廿四文なり、拝見致し平野神社とこ北野天神様ニ至リ、是ハ殊之外明なり、爰の丁子屋ニ而中食、地藏ニ至り嶋原焼跡を通る、西本願寺・東本願寺六角堂、夫より美濃や帰る、出雲寺へ寄ル、皆々本を覺メ

一四拾四文 金閣寺割合

一十九文 わらじ

一三百文 御札・中食・土産物其外色々

一式百文 すゞのさじ式本

一百文 巾着 壺

一金菅朱ト百文 出雲寺瀛奎律髓本

一五拾式文 案内賃割合

三日天気好、蓮沼式人と松尾梅之宮へ参詣、曉方ニ行、才助・次郎平六角通りへ至りて、弓を射ル、夫々所々をひやかし宿へ帰る、其内兩人帰り、夫より御所へ趣ク、参詣人如山、久ク待テ朝日御門より這入、禁中難有拝見致、御鶏合ヲ見ル、□□□□出る此時参詣人之内ニ容顔美麗なる娘壹人居レリ、誠ニ忘れがたし、夫々美の屋へ帰り、宿払致、茶代金壹朱ニ置、亭主京絵凶色々々□れる、宿を立、大仏様へ至りつり鐘おもさ壹万七千貫め也、三十三間堂ニ至り、夫より三里程も行て伏見なり、片旅籠ニ付五ッ半時三番舟ニ乗り、舟中好ころじニ眠イル、何時か知らね共、舟付テ餅を食らい、又曉方目醒レハ大坂ニ到り、予あたらしわらじ無シ、夫々淀屋橋南詰松屋卯平方ニ到り

- 一四拾文 弓損料
- 一六拾四文 磁石
- 一拾八文 色々
- 一九百貳拾四文 美濃屋払
- 一百文 茶代わり合
- 一五文 大仏もち
- 一拾貳文 同所瓦施主
- 一八文 すし貳ッ
- 一拾八文 わらじ

一貳百七拾五文 伏見片はたご舟賃共ニ
 一廿四文 ふとん壹枚
 四日天気好、大坂松屋ニ而支度いたし、荷物を預ケ、夫々陸地を行、予方角を取違て東ニ行様ニ斗り思ひ、三里も行て尼ヶ崎ニ至り、夫々西之宮へ参詣、爰ニ而中食予漸本生ニなり、又生田大明神へ参詣、宝物を見る。十人迄も百文宛なり、あびらの梅有、石碑ニ

遊ぶ金称 桃室

一樹見のこす桜かな

凡十丁も行て楠正成の御墓所へ参詣、諸大名より上りし石燈籠数多有、石碑ニ

万代にあほくや

楠の霜はしら

- 兵庫ニ至り柝屋長左衛門方ニ伯り、此日舟・橋代おふし、
- 一百文 松屋卯平ニ而
- 一八拾文 西ノ宮ニ而中食
- 一拾九文 宝物わり合
- 一廿八文 すし
- 一三拾文 舟ニ橋六度
- 一貳百廿四文 柝屋またご
- 五日宿を立清盛公の墓参り、一里行て須摩寺へ参詣、宝物を見る、

色々有、次ニてつかい山盛の蕎麦を食シ、舞子浜ニ到り奇麗なる所
なり、久兵衛様舞子焼を覓メ、二里半程も行って明石ニ到り、弁当致
シ飯たこうまし、人丸様へ参詣、不断柿有、御姿を頂戴、石碑ニ

蛸壺やとかなき

夢を夏の月

えせを

四里あまり行て別府宮ニ至り、手枕の松を見る、魚屋花太郎方伯
る、夜の酒を呑ム、

一四文 もち

一拾壹文 見物料

一四拾八文 蕎麦切

一拾六文 舞子ニて

一廿四文 飯だこ

一四拾壹文 わらじ紐ニわらじ

一十文 御姿

一拾貳文 こわめし

一三拾貳文 髪

一七拾文 酒わり合

一貳百文 旅籠

六日宿を立、尾上ニて古天竺釈迦如来之製タル鐘を見八ヲいも同様
ニ鳴ル、本社住吉様なり、都恋しきの松有、相生ニして男女入替り

の松なり、夫より高砂ニ至り松を見ル、本社祇園様也、すりや伊七
郎方ニ休ミ、又吉里も行って石宝殿へ参詣、蓮沼・植松兩人観瀆処へ
廻る、小生も行って、曾根天神様へ参詣、半道も行って豆崎ニ而弁当、
又式里半斗りも行って姫路宿なり、革細工を買、夫が山田峠ニ休ミ、
いかるがの綿屋ニ伯り、頂寧なり、茶代百文置、

一五文 つり屋茶代

一拾貳文 石宝殿縁記

一拾六文 豆崎ニてさい

一六百文 革蓆入貳ツ

一四拾四文 もち菓子酒所々ニて

一拾八文 舟渡シ三度

一貳百文 綿屋払

一貳拾文 茶代わり合

七日宿を立、片罵ニ休ミ、夫がなしが原手前ニて昼食、三ツ石ニ而
休ミ、片上宿恵比須ニ伯り、人込ニて甚タせまし、此処ニ入海あり、
本海には三里有ト云、

一廿貳文 舟渡シ三度

一三拾五文 白酒すし酒所々ニ而

一十八文 弁当たい

一貳百文 旅籠

八日天氣好、曉六ニ立、四五丁も行、予守袋なし、宿へ帰り持参、伊ンベニ至り六平様瓶をあつら江□小べん色々焼物買イ、夫々壹里も行て蓮沼兩人侍ニ成りて舟賃をかする、天皇ニ而休ミ、一日市ニ休ミ、藤井ニ休ミ、岡山ニて昼食、当所好城下なり、次ニ備前備中ノ吉備津様へ参詣、大社ニ而見事なり、此辺当百銭は取兼候、庭瀬の川入屋ニ伯り、点句といかゝるをする、

山影北で

白増いも増ねをなで大行

ふと大ん引女有者北ト宿屋増かな

一百三拾貳文 備前焼

一三拾六文 岡山ニ而うどん

一拾六文 同さい

一三拾貳文 吉びつ御札

一三拾六文 色々小遣

一拾六文 天皇ニ而舟賃

一貳百文 旅籠

九日天氣好、先天城アノの渡ワタをこし、藤の戸ニ休ミ、夫より倭加山ニ趣ク道筋ニ小倉を機家数多あり、久兵衛様爰ニ而小倉帯を沢山買、其歌おも白し、登行て中食倭加山上りて参詣、四国手ニ取様ニミゆる、風景よし、田之口ニ下り、竹屋虎五郎方ニ至り支度致、其中雨

天トなり、出船無追々人込ニなり、拙者共外拾五人斗リニ而其向いの家に行うどん屋ニて美淋うとんを食シ、点句誹詠をする、好句と壹ツも出来ず、

一三文 あまぎノ渡シ

一拾貳文 藤ノ戸ニ而味りん

一貳拾六文 さい

一百貳拾六文 倭伽山御札

一三拾貳文 髪

一四拾四文 うとん味りん

一貳百八文 竹とらとたご

一百四文 船ちん

十日雨天なり、五ッ時舟ニのり海面波平、小島幾点シ遠山入霧看も不見、漁舟五六十有、無程丸亀ニ到、柏屋団次方ニ而中食、荷物を預、夫々雨中三里程行て象頭山麓ニ到り、森屋喜太郎方ニ而傘を借り、御神酒を求め、御札を頂キ、夫より御山へ登り、先金堂へ参詣、次ニ御本社様へ参詣、御神酒献し、三度廻り誠に難有して賑也、観音様へ参詣、絵馬堂を見物、其外所々へ参詣、諸社明成事如金銀、先々目出度宿へ帰り、此所ニ廿五匁段々の傾城有、皆々目出度祝トして金山寺を買テ一晒落致す、

一拾五文 丸亀ニ而わらじ

一拾貳文 同 小遣
 一拾三文 わらじ
 一百貳拾四文 御神酒
 一六匁 御札六まい
 一金貳朱 金山寺
 一四百五拾文 森屋伯賃祝賃共ニ
 十一日雨晴、朝象頭山へ參詣、夫々森屋を立、善通寺へ參詣、塔普請中なり、いや谷へ參詣、屏風か浦を通る、たどつへ出る、爰も好所なり、丸亀ニ帰り金毘羅様は是迄五里有、柏屋ニ至り遊ニ出る、色々を食イ夜る商人來り、又天句誹諧をする、
増 染はむるかに成りて女中哉
大 山ニ水無き処をすかるゝ
北 待かねる桜の山とまア御出
大 あすは揚屋ニいねるたのしミ
 一十四文 松ミとり
 一拾貳文 いや谷とら明○
 一三拾六文 所ニ而色々
 一七拾四文 酒肴・うどん丸亀にて
 一百四拾四文 商人払
 一三百貳拾文 柏屋払

十二日天氣好、ゆほうを懐中して大坂淡路屋池吉丸之舟ニ乗り、百五拾文にて団蒲(ママ)をかり、八ッ時田の口ニ付、乗合の人儉伽山へ參詣、其内田の口ニ而遊ぶ、客歸りて又舟を出ず、夜九ッ時銚をおろし、
 一三拾壹文 菓子い玉
 一百五拾文 ふとん
 一百七文 田の口ニ而小遣
 十三日晴天、五ッ時帆を掛舟を出シ、夫々天句をやる、
増 浮舟に春の日長の貧かな
 予舟中ニ而讚州飯の山之図を写す、八ッ時舟を留め夜雨ふり、風荒くなり、又出船致、明方又留、
 十四日雨天、波高して乗合皆々大酔なり、此時四棹鳴人勝次郎棹を漕て嶋ぐるへ至ル、又魚舟を頼、舟を引かして八ッ時大タボの湊へ這入バ、外の船は五拾艘余り爰ニ居レリ、片側町ニ而好処なり、爰へ上りて酒を呑ミ、アミの塩からを買、夫々舟中ニ而夕飯、其中天氣宜相成、夜七ッ時帆をあげ出船致す、
 一十七文 魚舟行のわり合
 一三拾壹文 大タボ酒肴
 一廿五文 アミノ塩から
 一十六文 ゑつごう
 十五日暁方室津ニ至り、四棹ノ人近江ノ人都合七人此所へ上り、拙

者共舟中四方を望みて行、岩上菅正のたぬきを見る、天気静ニして風景宜シ、姫路沖にて昼食、夫より磯畔へより舞子之図を写、一之谷、武の谷山色面白し、やま森蕎麦之辺り道者松陰ニちらりふらりと見る、商舟来りなぐさみを買、

一十四文 するめ

一十六文 菓子

一十六文 酒

予一詩を作す、

暮春海上水波閑白鷺雙々相共還欲写舟中山色好東山乍變作西山

其夜兵庫沖ニ伯ス

十六日薄曇り、風帆高掛て走る、四方山色遠し、又風静ニ成りて予

一句云

大舟を寝所に彼の日長成

八ッ時西風強ク舟大に走ル、浪花近く行、予又一詩を作る、已ニ

用前額ヲ

一日波高一日閑揚帆下銚不知還五朝已隔浪華近客子欲看天保山

夫より大坂湊口ニ至り、右ニ天保山有、次ニ人家兩岸ニ在、大船・

小船並び居事凡一万そうも有、上り下り之舟あまた限りなし、中ニ

も文遊山舟もアリ、安治川橋ニ到り船を付、爰ニ上り乗合皆暇々を告

ケテ別るゝ、拙者共船頭案内ニ而松屋卯平方へ到ル、其内乗合之

越後之人兩人来り、同坐敷ニ伯り髪を結ウ、取貝のすミそ塩梅よし、夫々状を認め國本へ出す、己ニ酒宴トなりて酣醉共ニ臥ス、

一金貳朱ト百文 船賃

一三拾貳文 髪

一十六文 鮓

十七日天氣好、井筒屋喜兵衛ト云茶屋ニ付、芝居ニ入ル、狂言妹背

山なり、三辨大五郎・片岡市蔵・嵐璃寛・中村歌六、是等が役者な

り、其内菓子茶来り、小使三文なり、中入ト成井筒喜ニ而中食、酒

を呑、小夜の中山荒井之舟ニて同々に成りし甲州人爰ニて同く芝居

を見る、夜四ッ時芝居終りて宿へ帰る、

一金貳朱ト百五拾四文 井筒屋払

一三文 小べん(便弁)

一廿四文 菓子甘酒

十八日越後の人案内ニ而橋々を通る、鴻池其外金持長者を教わる。

夫々越後ノ人ニ別レ、拙者共斗リニて見物、御灵所西御堂・東御堂

参詣、石門を抜て坐摩ノ神社、次ニ稻荷様へ参詣、新町を通り御城

を拝見、百廿間の橋を越シ、青物市ニ而蓮沼白瓜老本を買イ、天神

様へ参詣、金ノれんに句有、

ねかふ身に歳代喜かほりや梅の花

恵比須庵 対文

爰ニて昼食、夫が宿ニ帰り払方いたし、茶代金貳朱置、宿を立、日本橋を越シ、高津へ参詣、此所大坂中一目ニ看ル、生玉神社へ参詣、天王寺参り、天下茶屋ニ而休ミ、住吉へ参詣、大鼓橋を越シ、次ニ男女之でこを買、浪花屋の松を見ル、夫が堺ニ至り鉄炮かじや多、次ニ刃物鍛冶屋多シ、当所高菱屋ニ伯り、彼の白瓜ニ而一盃呑ム、此夜瓜と酒は蓮沼が奢り、鯛の煮付三むいは久兵衛・才助・二郎平三人ニ而奢り其内金物屋来り、

一十貳文

味淋

一百文

中食

一金貳朱ト

松屋卯平払色々

七百七文

一十六文

わらじ

一貳百文

画本

一十五文

天下茶屋ニて

一十四文

住吉前でこかぼう

一十四文

浪花屋あんころ

一貳百文

高びしや伯り

一百文

肴わり合

十九日暁方魚市へ行鯛多シ、其外魚数多有、誠ニ仰山ニして如山、皆生魚なり、槇尾寺の開帳、爰の天神様ニ有行長鉢植の松を見る、

夫が宿ニ帰りに朝食、直ニ出立(因)印之金物屋ニ至り、色々買、此家人案内ニ而妙国寺蘇鉄を見る、少シ行て仁徳天皇様の墳有、古木・鳥多して木ニ葉すくなし、福町ニ休ミ此辺弘法様の御縁日近して赤飯むすび・豆いり杯施(接待)たいあまたあり、拙者共も度々貰イ、ぐミの木ニ而中食、三日市ニ休ミ、夫が紀見井峠ニ上り、岡屋忠兵衛方ニ休ミ、橋本ニ至り、無銭舟を越し、三軒茶屋松屋惣八方ニ伯り、好家なり、下女杯皆々遊女のごとし、

一九百三拾八文

刃物色々

一十五文

福まちニ而

一三拾貳文

ぐミの木ニ而

一四文

きミの峠小供荷物越背代

一廿七文

岡やにて

廿日天氣好、かむろ宿爰ニ売女有、かる茅堂ニ参り、夫が山道なり、かね町桜屋ニ休ミ、かミや町花屋市兵衛方ニ休ミ、帳面を改メ御ミきを出す、橋本が是迄三里なり、此家が案内を付て坊迄送り、此内も寺里有、蓮沼・植松三人も六院ニ到り、才助・二郎平も本覚院ニ至ル、金巻朱包ミ、茶代貳百文包ミ御馳走有りて寧頂なり、爰が案内付て暫行商屋ニ入、爰家も又案内付て諸墓口訳色々を教へ、弘法大師様へ参詣、明日も御ころも御取替ニ而今日辺りも賑也、夫が歸りて又坊へ寄り御札をいたゞきて帰る、夕刻三軒茶屋松屋ニ帰る、

誠ニ人込ニテ拙者共ニ別座敷ニ居ル、閑ニしてよし、あんま来り、

一十六文 紙

一十八文 桜屋ニテ

一四拾八文 花屋ニテ

一貳百十貳文 坊ノわり合

一 百文 茶代わり合

一 百文 珠琰

一 十四文 わらじ

一 十六文 ミりん

一 四百貳拾文 松屋ニ伯り

廿一日天気好、無銭舟をこし五條町を通り、大和国まぢく峠ニ休ミ

白酒うまし、うの宿芝屋源兵衛方ニ而中食、此日暖ニして滞屈ニな

り処々の弘法様ニ而参詣人多し、予一詩を作ス、

山林初啼一蟬新油菜花開道路句今日也維空海日幾回相見談粧人

夫々吉野川辺ニ度々休ミ又此川を越サントすれバ旅人ヲバ断り候

処、近辺女中弘法様へ参詣、戻リニテ女中ト一同ニ舟を越し、夫々

吉野山ニ登り、桜花皆々落花なり、石碑有

とほくとおつる岩間の苔清水

汲ほすほともなき住居かな

右苔清水

吉野山去年の枝折の道かへて

また見ぬ方の花を尋ねん

右枝折 西行法師

爰ニ而暫休ミ又芭蕉翁之石碑あり

花さかり山は日比の朝ぼらけ

予芭蕉翁之句を見て一句やる

こせを翁某よりも四日前

千本の桜も青し吉野山

夫々さこやニ休ミ観音堂へ参詣、つゝじ柱あり、吉水院へ参詣、宝

物を見ル、義経・弁慶ノ刀冑しようくくの毛ノ簀、忠信ノ箭ノ根、

ゑんの行者ノ尺丈、仲左作千体地藏、小野道風の画、清浄発心ノ

玉、弘法大師ノ作弁天、弁慶力くぎ之石、名馬足跡、其外数多あ

り、夫々桜菓子を買イ、段々坂を下り久兵衛様一句云、

坂おわりて舟をこし、上市町角屋ニ伯り、

一 八文 白酒

一 廿四文 芝屋ニ而

一 八文 小遣

一 四文 同

一 六文 舟ちん

一 廿八文 さこやニテ

一八文 宝物

一式拾文 桜菓子

一十文 舟

一式百文 角屋払

廿二日小々雨天、山道にて難所なり、四軒茶屋の松屋ニ休ミ、此座敷好所なり、大坂町通り天保山紀州高野山々南之方迄高取ノ城大和中一目ニ見ル、夫々塔ノ峯ニ至リ、木屋平右衛門方ニ休ミ、参詣致す、鎌足公の御墓所にて見事なり、御玉屋を拝見、十三蓋ノ塔有、又木屋ニ而中食、各々ノ荷物を爰々追分迄贈ル、夫々菅里下りて岡寺へ参詣、茶屋源太郎方ニ休ミ、立花寺へ参詣、夫々西ニ向テ行、たゑ摩寺へ参詣、又雨天ト成ル、下田宿米屋茂兵衛方ニ伯り、

一八文 かし

一十式文 わらじ

一十二文 御玉屋拝見料

一廿四文 さい

一三拾八文 荷物代

一十四文 茶代

一十文 まはり川にて

一八文 ミまニ而案内

一三拾式文 下田髪

一廿四文 ミりん

一式百廿文 米屋伯り

廿三日天気好、宿を立、達摩寺へ参詣、龍田へ参詣、次ニ法隆寺へ参詣、案内取り、正徳太子之御作ニ而、誠ニ古キ物なり、小泉ニ休ミ、郡山にて中食、西ノ京正大寺菅原天神様へ西大寺参詣、法華寺を通り奈良ニ至リ、案内ヲ取り、大仏様参詣、御高五丈三尺五寸、面壹丈六尺、目三尺九寸、口三尺七寸、耳八尺五寸、螺髪九百六十六、各高壹尺、二月堂参詣、御札ヲ買イ、春日大明神様へ参詣、鹿あまた居ル、きらずを遣ル、角細工を買、下へおりて御札無銭ニ而頂すト云テかける所有、蓮沼、才助を式百文宛ツ取る、夫々帯とけ宿吉の屋ニ伯り、

一四文 橋代壹度

一十式文 案内

一十式文 薬師様御札

一八文 小泉

一廿八文 郡山ニ而

一式百文 二月堂

一十六文 色々

一四百分 角細工

一十式文 酒肴

一式百文 吉野屋払

廿四日天き好、宿を立、在原寺へ参詣、辻村ニ休ミ、夫がミわせ大明神へ参詣、金谷ニ而そうめんを食イ、追分小間物ニ至リ酒を呑ミ、女商人来リ角ノ櫛を買イ、右之荷物を爰が背イ次ニとせの観音様ニ参詣、見事也、其下吉野や平左衛門方ニ而中食、夫より伊賀の国西峠ニ休ミ又草上ニ二度計リ休ミ、安部田村ニ休ミ、なごり宿小竹屋彦兵衛方ニ伯リ、人込なり、

一八文 辻村ニ而

一十六文 金谷ニ而

一十四文 追分ニ而

一百四拾八文 角櫛三枚

一廿九文 吉の屋ニ而

一十式文 わらじ

一廿六文 豆イリ色々

一十六文 紙

一八文 ミりん

一六文 すし

一式百文 小竹屋払

廿五日晴天、宿を立、伊賀茶屋ニ而中食、夫が谷川ニてふんどしを洗い、峠を越シ、又蓮沼ト兩人ニてじむんを洗、桜峠ニ休ミ、また

町油屋ニ宿リ、釜の水風呂ニ入、白米を買イ宮廻り参銭ニ用ル積リ、此家も頂寧也、

一八文 もち

一十六文 伊が茶屋ニ而さい

一十式文 橋代

一四拾式文 桜峠団子蕎麦

一八文 油屋ニ而味りん

一十式文 口紙

一十文 白米

一百八十文 油屋旅籠

一廿四文 同所茶代わり合

廿六日上天気なり、宿を立、二里程も行て六軒町ニ出ル、爰ニ休ミ、予嘉永五子年春通行ニて処々覚あり、松坂ニて禽獸を看ル、櫛田ニ而昼食、爰が江戸ト伊予の伊勢参リ、小蔵ニ荷物をもたせ、八ツ時山田妙見町桔梗屋太郎兵衛方ニ付、髪を結、湯ニ入、植松縁家へ行、直ニ帰り飯後下女案内ニ而古市町備前屋玉楼へ上リ、其内本並遊女三拾人も来リ、各々好を目指て酒肴ト成ル、初松魚有
増田春吉北梅路蓮沼小寄井律肥酣醉夜半人在、夢滋蔵長上水戸妃

右青楼夜記 二郎平

蕨ル共、根は動かざる柳かな

右青楼にて

金風

夫々曉方宿ニ帰り、朝湯ニ入、小女具来り遺物有

一五文 六軒にて

一八文 鳥けだ物

一十文 団子

一四拾六文 榎田ニ而中食

一十四文 横田川舟

一六文 舟

一三十式文 髪

一三拾式文 帯

一廿式文 草り

一金壹分式朱 備前屋

一三十九文 小じやくわり合

廿七日雨天ト成り、間の山ヲこし、古市町心うれ敷通り内宮様へ参詣、夫々段々宿ニ帰りて昼食、鯛のあか味噌焼うまし、此家頂寧なり、弘方いたし茶代金式朱置、宿を立、夫々下宮様へ参宮、両宮共雨天ニ而宮通り出来ず夕方榎田東屋ニ伯り人込なり、

一十文 貝杓子内宮様前ニ而

一三百廿七文 桔梗屋払

一貳百六文 茶代わり合

一十四文 山田ニ而わらじ

一三十文 大神宮御札

一廿文 小遣二度

一十四文 榎田川

一六文 川

一貳百文 東屋たご

廿八日曇り、宿を立松坂ニ而国々の人形を見ル、津の宿ニ至りよしやニ而中食、七ツ時白子宿万屋七助方ニ伯り、

一十式文 人形

一十文 もち

一十文 雲づ川

一四十文 津ノよしやニ而

一十式文 色々小遣

一百八十文 万屋旅籠

廿九日小雨、宿を立追分ニ而酒を呑ミ、四日市宿竹屋ニ而中食、大ニ安シ、おぶけ村ニ而焼蛤をやらかし、桑名塚屋三郎右衛門方ニ伯り、頂寧なり、貳百文茶代置、好娘あり、

一十三文 白子わらじ

一十九文 追分酒さかな

一四十八文 四日市中食

一五文 団子

一廿貳文 やき蛤

一十六文 すし

一貳百文 堺屋とまり

一四拾八文 茶代わり合

四月朔日晴天、宿を立、船ニ乗り九ツ時宮ノ一里も手前ニ付、小舟ニのり又小舟ニのり宮ニ付、中食七ツ時、地りうニ至り大明神様の祭礼ニて賑なり、屋台三ツ有、山吹屋ニ伯り、髪を結イ、予伊勢参宮之時も此家ニ伯り、鄰座敷之事を思ひ出し、各々ニ咄す、頂寧ニして茶代貳百文置、

一百六拾七文 七里舟ちん

一十六文 弁当

一十貳文 かし

一十六文 小舟

一十六文 同

一六十貳文 宮ニ而中食

一八文 すし

一三十貳文 髪

一廿一文 味りん

一貳百文 山吹屋伯り

一四拾八文 茶代わり合

二日天気好、宿を矢立説カとぎの橋ニ至り、彼の叟拙者共を覚オモ而居てへや

御早ふ御座ります、と詞を掛、爰ニ而甘酒を呑ミ、夫々藤川ニ而中食、

赤坂ニ至り瓢たんを買、御油ニ而休ミ、各々瓢を買、雨天ト成り吉

田宿柁屋ニ伯り、頂寧なり、

一十貳文 すし甘さけ

一十二文 矢とぎ川

一十五文 岡ざきニ而

一七拾貳文 辰巳屋ニ而中食

一三四拾八文 赤坂瓢一

一十五文 さけ

一貳百文 吉田柁屋泊り

三日雨天なり、宿を立、四ツ時ノ晴天、荒井宿紀之国屋ニ而中食、夫より舟ニ乗り、舞坂ニ付、一盃呑ミ、七ツ時浜松宿帯屋ニ到着、先帰国之祝トして目出度二階ニ而一しやれ致す、売女髪形替りてよし、予一句云

幾百里過れば今宵又おまん

一十貳文 柏もち

一十貳文 わらじ

一五文 粟もち

一七十文 中食

一三十八文 舟ちん

一十九文 舟玉

一十八文 舞坂ニ而

一五五文 帯屋ニ而おまん

一三〇文 酒肴

一貳百文 旅籠賃

一四拾八文 茶代わり合

四日天気よし、腰ふら〜と宿を立、天竜川をこし、見附ニ而各々土産物を買イ、夫々昼食、袋井ニて壺盃呑ミ、原川ニ至リ、日坂弥一右衛門爰ニ居レリ、明五日下午の状ヲ詠へ、夫々掛川宿捻金屋ニ伯り、夜の夫々に荷物を分けて別の酒宴をいたす、矢勝来りて又壺盃、多分ニ呑ム、皆々大酔なり、

一十八文 天竜川

一十六文 同小渡

一廿五文 生中ニ玉子

一八匁七分 見付ニ而矢立

一四十六文 中食

一廿四文 袋井ニ而酒

一六文 原川ニ而

一貳百廿四文 掛川ニ而きせる式本

一三百廿四文 両天傘

一六百六拾四文 小倉帯

一三百六拾四文 土産色々

一〇四文 酒肴わり合

一貳百十六文 捻金屋伯り

一四拾八文 茶代わり合

五日天気よし、髪を結イ四ツ時宿を立、成滝ニ而名残惜くも久兵衛様ニ別レ、夫々日坂宿東屋ニ至れば、鳶次・伊助向イニ来り、先笑て寒燠を述べ、次ニ酒肴と成り、昼食致し、滋さは暇乞して立、夫々仕度して出立、峠新屋ニ而休ミ、菱屋前ニ而六平様ニ別レ、拙者共は四人ニて山道ニ入ル、松の根ニ至レは喜三・勝蔵・新吉・吉五郎居レリ、久々爰ニ而故郷をながめ、坂を下レは追々向人來り、子供皆々ニ菓子をくれる、宮参濟て七ツ半時我家ニ帰る、各々に暑寒を述、荷物分て才助様ニ別レ、先々皆々無事ニ而目出度事なり、ア、嬉哉々々、夫々近所之衆ニ而賑なり、

一三十式文 髪

一〇十卷文 うるし

一〇四十八文 菓子

一七拾四文 日坂の状ちん

一三百廿四文 東屋弘

一四拾八文 しんや

一貳百文 宮参参銭

六日天気好、雑事ニ而賑なり、皆々酔てむッレレの歌大に流行なり、晩方雨ふる、七日雨天、八日も雨天なり、九日雲レ共雨ふらず、親父土産物を金谷宿へ買ニ行、十日天気よし、村中ミやけ物を配ル、十一日天気好、予安閑として休ム、己ニ一詩を僅ル、

帰家書事

鬼川橋上美人遊、天保山辺玉艇浮最是帰家何処好桜桃結実緑陰稠

(国立歴史民俗博物館 歴史研究部)